

J・F・ヘルバルトの類化論と 初期牧口思想の形成

伊藤貴雄

はじめに

牧口常三郎の思想的淵源のひとつがヘルバルト (Herbart, Johann Friedrich) にあることは、従来の牧口研究でもしばしば指摘されてきたところであるが、その際にいわれる「ヘルバルト思想」とは、段階教授法のような「ヘルバルト派教授理論」(ラインヤツィラーのそれ) を指す場合が大半であり、ヘルバルトその人の理論が（ましてや19世紀前半を代表するカント派哲学者としての彼の哲学説¹⁾ や心理学説²⁾が）牧口との関連で論じられる機会は必ずしも多くなかったといえよう³⁾。しかしヘルバルト派教授理論はもとより、その源流とされるヘルバルト自身の教育学説も、元来は彼の哲学や心理学に堅く基礎づけられていることを考慮すると、ヘルバルトの哲学思想そのものに眼を向けることが牧口解釈にとって重要な作業であるように思われる。

そこで本稿では、牧口の初期の論文を取り上げつつ、「類化」というヘルバルト哲学・心理学の主要概念が牧口の思想形成において重要な役割を果たしていることを示したい。とくに注目したいのは、牧口最初の公刊論文とされる「観念類化作用」(1896 [明治29]) である。この論文は、題名からも理解されるようにヘルバルトの類化論を正面から扱ったものであるが、未完ということもあり、従来牧口研究で言及されることはほとんどなかった。しかし同論文で牧口が示した見解を、その後彼が書いた諸論文の内容と照合すると、ヘルバルト思想が牧口思想の出発点として有した意義の大きさが見えてくる。

はじめに、問題の類化論を、ヘルバルト自身の著作に即して概観し（1）、つ

づいて、牧口の「観念類化作用」における類化論理解を牧口の論旨に即して捉えつつ、その理解のあり方に影響を与えたと思われるヘルバルト派教授理論の書物の内容と比較検討する（2）。最後に、牧口の類化論理解のあり方がその後の彼の著作においていかなる形で影響を与えているかを考察する（3）。

1. ヘルバルトにおける「類化」

類化は、原語で *Apperzeption* といい、ヘルバルト哲学・心理学の主要概念であるが、これはカント学徒としての彼の思想を特徴づける概念としても重要である。周知のとおり、*Apperzeption* はカント哲学の最も重要な概念のひとつであり、日本ではふつう「統覚」と訳されている。それゆえヘルバルトの類化もカントの統覚と無縁ではなく、じっさい明治期のヘルバルト紹介書においては *Apperzeption* が統覚と訳されたこともある⁴⁾。したがって類化を論じる際には、カントとの関係も視野に入れておく必要がある。

ヘルバルトのいう類化については、彼の『学としての心理学』(*Psychologie als Wissenschaft*, 1825)，とくにその第2巻第1章が詳しい。それによると類化とは、人が自分の有する表象群をもとに新しい表象群を同化することである。つまり、人はある表象に出会ったとき、自分が以前から有する類似の表象群を喚起して、眼前的表象群を——部分的に混合・変化させつつ——把握する、これが類化の意である（6, 142）。この理論は一見単純そうにもみえるが、じっさいは彼自身の認識論と、彼がその哲学の多くを負っているカントの認識論に基づきづけられており、解釈には十分注意を要する。そもそも「表象」(Vorstellung) の語からして、その定義いかんによっては理論の理解に大きな差異が生じてこよう。それゆえヘルバルトの表象論が（カントとの関係も含めて）理解の要となる。

ヘルバルトは「表象の力学」⁵⁾ という彼の術語からも知られるように、人間の認識作用を表象の運動によって説明しようとした。ここでいう表象とは、物理的刺激によって生じた印象（色・重さ・味などの感覚）がその刺激の消滅後も残存するところの、心的事象の構成要素のことである⁶⁾。いわゆる自我や意識とは、こうした表象の集合にはかならない。この表象群を支配している法則が表

象の力学である。各表象はそれぞれ強度を有し、互いに抑制しあうが、その結果、各表象は質を変えずに量を減殺しあって、互いに相手を不明瞭にしたり、排除したりする（5, 281-7）。ある表象Aが他の表象Bを完全に抑制したとき、表象Bは意識下に沈潜するが、この意識の限界線は「識域（Schwelle des Bewusstseins）」と呼ばれる。しかし識域下の表象は、他の表象をきっかけにしてふたたび意識に浮上してくる（5, 288-97）。上記の類化は、まさにこの表象の再現に関わっている。新たに出会う表象群に対して、識域下から再現された表象群が優位を占めることにより、前者のなかから後者と類似する部分が混合され、類似しない部分が捨象される。そうしてふたたび明瞭な表象の形成がなされる。これが類化である。

しかし、こうした説明だけでは、類化論はきわめて古色蒼然とした近代認識論の典型のようにも受け取られよう。心象（image, idea）がそのまま概念（言語の意味）であるかのように捉えられる可能性があるからである（ロックの「言語の意味は idea である」という言明と同種のものとして）。このように解釈される限りでの表象論が少なからず問題をかかえていることは、20世紀に入ってから多くの哲学者によって指摘してきた。たとえば、こうした表象論によれば「赤」という語の意味は、その語を発する人が心のなかにもつ〈赤〉の心象であるということになるが、それではふたりの人間が各々心に宿している心象の同一性を保証するものがなくなり、言語の「公共性」を説明しえないという指摘である。だがこの種の批判をそのままヘルバートに向けるのはいささか性急にすぎると思われる。なぜなら、彼は心象と表象とを完全に同義では用いておらず、概念の心象からの独立性（つまり言語の公共性）を主張してもいるからである。

この点に気づいていたのは現象学の創始者フッサールである。彼は『論理学研究』第1巻のなかで、カント学派とヘルバート学派が心理学主義（論理学を心理学に基づけようとする立場）をとらなかったことを評価し、とくにヘルバートについて、「[...] ヘルバートはカントよりもいっそうわれわれに近い立場に立っている。その主な理由は、彼の場合にはある枢要な点がいっそう明確に強調され、そしてそれが純粹論理学的なものと心理学的なものとの区別にはっきり結

び付けられているからである。この点で事実決定的な、その枢要点とはつまり『概念』の、すなわち純粹論理学的意味での表象の客觀性のことである⁷⁾と述べている。ここでフッサールはヘルバートが概念の客觀性（心象からの独立性）を主張したことを評価しているわけだが、その際彼が傍証として引用するヘルバートの文章の多くは、じつは類化論が展開されている『学としての心理学』第2巻第1章を出典としているのである。

たとえば同書の第120節から、「すべて思考されたものは、その質についてのみみれば、論理学的意味ではひとつの概念である。 [...] その際、思考する主觀はおよそ重要ではない。そうしたものに概念を帰属させるのは、ただ単に心理学的意味においてのことであり、むしろそれどころか、人間や三角形などという概念は誰にもその所有物として帰属してはいない。一般に論理学的意味では、どの概念もただ一度だけしか存在しないのである。もし仮に諸概念の数がそれらを表象する主觀の数とともに増えるとするならば、 [...] こうしたことがあるはずはない」（6, 119）⁸⁾とのヘルバートの文章が引用されている。ここでヘルバートは「表象する（vorstellen）」と「思考する（denken）」とを同義で用いており、彼のいう表象が心象に限られるものではなく、心象から独立した存在である概念（フッサールの表現では「純粹論理学的意味での表象」）をも含むことを示している⁹⁾。それゆえヘルバートのいう類化も、心象群が別の心象群を類化するという解釈だけでは不十分で、概念群が別の概念群を類化するという解釈も十分に成立しうるし、むしろ言語コミュニケーションの場合を考えるときには、後者の解釈こそヘルバートの意に適うものであるといえる。さらにいえば、既知の概念群によって感覚世界を明確な対象として把握することが類化であるとも表現できるし、その場合類化は〈概念と感覚との共同作業〉によるわれわれの認識活動そのものであるといえよう。

こうしてみると、ヘルバートが類化を Apperception という語で表現したことはなかなか意味深く思える。というのも、上述のような議論はそもそもカントが『純粹理性批判』において道を敷いたものだからである。「われわれが対象から触発される仕方によって表象を受け取る能力（受容性）を感性という。感性を

介してわれわれに対象が与えられ、感性のみがわれわれに直観を与える。ところで悟性によって対象は思惟される。そして悟性から概念が発現する」(「超越論的感性論」緒言)¹⁰⁾、「あらゆる直観は感性的なものとして触発に基づくが、概念は機能に基づく。ここで機能というのは、種々の表象をひとつの共通な表象のもとに統制するはたらきの統一性である。ゆえに、感性的直観が印象の感受性に基づくように、概念は思惟の自発性に基づく」(「超越論的分析論」)¹¹⁾。直観によって与えられるのはただ多様な感覚にすぎず、概念がその多様を総合的に統一してはじめて対象認識が成立する。そして概念の機能を司るのがカテゴリー(純粹悟性概念)であり、そのカテゴリーを統括するのが統覚(Apperception)である。それゆえカントのいう統覚とは、主觀が直観対象を明確に概念化するための条件であり、すなわち「経験の可能性」の究極の「条件」である。カント哲学に多くを負うヘルバートが、対象認識の原理ともいべき類化を Apperception と名づけた理由も、こうしたカント認識論を視野に入れると十分首肯しうる。ヘルバートの類化論もまた、「経験の可能性の条件」を問うという、カントの超越論哲学の伝統に棹差していたといえるのである。

以上、ヘルバートの類化論を概観したが、この理論が彼の教育学の基礎をなすものであること、いまや明瞭であろう。類化が人間の認識活動そのものであり、認識を欠いたいかなる教育もありえない以上、類化はあらゆる教育活動の根底にあるものだからである。じっさい19世紀後半のヘルバート派教授理論家たちの多くはこの類化論を基礎に教授理論書をつくり、その影響はドイツ本国のみならずフランスやアメリカにも及んだわけであるが、それは当時近代国家への道を歩み始めたばかりの極東の小国・日本も例外ではなかった。ただし、上述のようにヘルバートの表象概念自体が多義的であったため、本稿筆者のみる限りヘルバート学派のなかでも類化論の解釈は決して一様ではなく、複数の解釈がほぼ同時に日本に流れ込んだようである。したがって邦訳書を通してヘルバート派教授理論を学んだ人々の間では、その解釈もおそらくまちまちであったろう。牧口常三郎もまたそうした人々のひとりであったわけだが、その問題については次節で検討したい。

2. 牧口の類化論理解

牧口の公刊論文で、現在確認されている限り最初のものが、彼が北海道師範学校附属小学校訓導時代に『北海道教育雑誌』第39、40号に連載した「観念類化作用」である。以下、同論文の内容を概観しつつ、牧口がどのような本を参考に、どのような類化論の理解をしていたのかをみていくことにする。

同論文は、「類化作用とは何ぞ」、「類化作用の教育上に於ける価値」の2節からなるが、本論に入る前に牧口は、「題して観念の類化作用と云ふ。[...] 固より予の思考したるにあらず、又発見したるにもあらず。全くケルン、リンドネル其他二三の著訳書を通読して其要を摘み、日常の実験に照し本題の下に排列したるのみ」(7, 144) と前置きしている。当時牧口が眼にしたであろうヘルバート派の邦訳書については、本稿前節の注4に記しておいたが、そのうち牧口が論文中で書名を挙げているのは、デガルモ(=デ・ガーモ)著・本荘太一郎訳『俄氏新式教授術』、ケルン著・山口小太郎訳『教育精義』、リンドネル著・田中治六・三石賤夫訳『麟氏実驗心理学』の3冊である。しかしこれらの訳書は Apperception に「類化」という訳語をあてていない。この時点において類化の語を用いている訳書は、管見の限り、リンドネル著・湯原元一訳『倫氏教育学』のみである。「観念類化作用」以後の諸論文でも牧口が用いるのは類化の語のみであるから、牧口が『倫氏教育学』を眼にしなかったとは考えにくい¹²⁾が、今はこの問題にはこれ以上立ち入らないておく。

つづいて牧口は「類化作用とは何ぞ」と題し、類化の説明をはじめる。ここで彼は子どもが「猫」という「観念」を獲得するプロセスを例にする。すなわち、白色か斑点の猫しかみたことのない子どもにとって、猫とは白色か斑点のものでしかない。そこへ黒猫をつれてきてその子にみせると、彼は心に類似の「旧観念」を再現する。黒猫の四肢、顔、声などがすべて旧観念と融合し、色のみが衝突するが、旧観念との共通項が多いため、「是は猫なり」という観念が形成される。それゆえ彼のなかでは、「猫とは其色に関せざること、なりて、猫てふ観念の内容、即性質は為に減少し、同時に猫の範囲、即外延は増加す」(7,

145) る。これが類化である。以上の説明を裏づけるべく、牧口はケルンの『教育精義』から「斯の如く、一観念群が他の観念群の為めに其形を変して、遂に相融合する作用を融会 [=類化] と称す」¹³⁾ という文章を含め、1頁近い引用をしてこの節を終える。

この牧口の説明をみるとわかるように、牧口は「観念」という語を、「心象」と「概念」との両方の意味で用いている。「白色、四肢、顔、声」といったものは前者に、「内容、性質、範囲、外延」といったものは後者にあたろう。ケルンの原著 *Grundriss der Pädagogik* をみると観念の原語は *Vorstellung*¹⁴⁾ であり、Idee ではない。本稿前節ではヘルバルトの *Vorstellung* が、心象 (Idee, Idea) と概念 (Begriff, concept) との両方を指していることをみたが、ケルンもその用法を踏襲したものと思われる。しかし心象と概念とでは、後者が前者に依存しない客觀性をもつという点で、その存在性格に大きな違いがある（本稿前節参照）。*Vorstellung* というとどうしても心象と解釈されやすいが、教育活動が言語コミュニケーション（もちろん手話も例外ではない）を通してなされるものである限り、それを概念として解釈する方向も重視されねばならないだろう。だがケルンの書を見る限り、そうした区別は徹底されていないようであり、牧口もその影響を受けていたとみることができる。

ちなみに、「観念類化作用」執筆時に世に出ていたヘルバルト派の翻訳書で *Vorstellung* の訳をみると（以下、数字は本稿注4の書名に対応）、①「総念」、②「観念」、③「心念」、④「表象」、⑤「念象」、⑥「心象」、⑦「概念」となっており、ひとつとして同じものではなく、意味も心象から概念までさまざまである。なお、*Vorstellung* を心象とする解釈を広めるうえで力あったのは、③から⑥、なかでも先述した④の湯原元一訳『倫氏教育学』と思われる。同書の巻頭にある「訳例七則」をみると、「表象」の項で「表象即ち *Vorstellung* とは、直観に依りて、我が心意中に表出したる客觀の形象にして、客觀なき後と雖も尚ほ永く我が心意中に残留する所のものを云ふ。例へば、今兎なる一客觀に就て、之を云はんに、先づ其耳の長きこと其尾の短きこと、其毛色、其大きさ等」（下線筆者）¹⁵⁾ とある。また「類化」の項では「即ち既に心意中に存在する表象と、将さに心

意に入り来らんとする表象を同化すると云ふ義なり」¹⁶⁾ とある。このふたつの定義を足し算すると、まさに牧口が猫の「白色、四肢、顔、声」の例で表現したところのものに重なる。しかし、リンドネルの原著 *Allgemeine Erziehungslehre*¹⁷⁾ をみても *Vorstellung* はとくに心象に限られているわけではないし、湯原自身も『倫氏教育学』第35章「新表象の類化」のなかで、「判定 [=判断] とは、未知を既知に、新を旧に、特別を一般に、多数を一個に、種を族に、主格を賓格に従属せしむる作用を云ふ。而して此従属作用は、實に類化の形式に於て行われる」¹⁸⁾ と訳しているところをみると、湯原が「訳例七則」で示した「表象」「類化」の定義が不十分なものだったといえる。リンドネル自身は *Vorstellung* に「概念」をも含め、したがって *Apperception* に「旧概念群による新概念群の同化」という意味を含めていたのである。

さて、第2節「類化作用の教育上に於ける価値」の内容に移ろう。牧口ははじめに、身体が滋養を消化するように、知識も「能く消化し、整理し、概括し、統一し、以て心意の一部とな」さねばならず、それをなすのは「類化作用」以外にないとして、その重要性を強調する。そして「之 [=類化] を遂げしむるは、教育作業中の最も緊要なるものと断言するを得べし」（7, 147）と述べ、その傍証として、リンドネル著『麟氏実験心理学』と、デガルモ著『俄氏新式教授術』とから5人の教育学者の文章を引用している。紙幅が限られているので、ここでは代表的なものののみ検討したい。

まず『麟氏実験心理学』からの引用。「リンドネル氏曰く、類化作用とは、軟弱なる新觀念を、勢力及内部組織に於て之より勝れたる、即ち強大なる旧觀念によりて、変化するの作用なりと」（同、下線筆者）。ここで注意すべきは、『麟氏実験心理学』のじっさいの訳文と多少の違いがあること、とくに原訳書では「自覺作用」「心象」とあるのが牧口の引用ではそれぞれ「類化作用」「観念」になっていることである。原訳は「新（弱）心象ヲ、勢力及ヒ内部組織ニ於テ之ヨリ勝レル所ノ旧心象ニ由リテ化裁スルコトハ、右心象ヲ不变ニ領受スル所ノ知覚ト區別シテ自覺作用ト名クルナリ」（下線筆者）¹⁹⁾。リンドネルの翻訳で『麟氏実験心理学』と題する本は、文献史的にみてもこれ1冊しかないはずである

から、牧口が引用箇所を明示しつつも訳語を変更した理由はよくわからないが、これは牧口が心象という語に何らかの違和感を覚えていた可能性を示すものとして興味深い事実である。

つぎに『俄氏新式教授術』からの引用である。「ガルモ氏曰く、類化作用とは、通常新たに得たる個体的の総念を、其外延及び内包に於て、更に一層完成せる老熟の賓位内に包容する作用なりと」(同、下線筆者)。ここでも牧口は、原訳書で「自覺作用」とある²⁰⁾ところを「類化作用」に改めているが、今はその理由は詮索しない。重要なのは、ここでデ・ガーモがはっきりと類化を「旧概念群による新概念群の同化」、もしくは「既知の概念群による知覚対象の把握」の意味で用いていることである。『俄氏新式教授術』では「総念」という語が用いられ、これはデ・ガーモの原書では notion であり²¹⁾、彼はこれを Vorstellung に対する訳語として用いている²²⁾。デ・ガーモによれば、総念には「個体総念」と「普遍総念」とがあり、前者は知覚(心象)あるいは個体概念を、後者は普遍概念を指す。そして両者の存在性格は大きく異なる。「普遍総念ハ、又々個体総念ト異ニシテ、之ヲ心中ニ画キ出スコト能ハズ」、「普遍総念ナルモノハ、之レ個体総念ヲ構成スルガ為メニ、其通則タリ、儀型タルモノニシテ、定義ヲモツテ之ヲ現ハスヲ常トス」²³⁾(下線筆者)。それゆえデ・ガーモがいう類化とは、認識法則たる概念群によって知覚対象もしくは新概念群を把握することを意味している。なおデ・ガーモは、ドイツの博士号をもつアメリカの代表的なヘルバート主義者で、リンドネルの *Lehrbuch der empirischen Psychologie für Mittelschulen*, 1858 (『麟氏実験心理学』の原著) の英語訳²⁴⁾を出しておられるから、彼の類化の解釈は先に挙げたリンドネル著『倫氏教育学』の「未知を既知に、新を旧に、特別を一般に、多数を一個に、種を族に、主格を賓格に従属せしむる作用」²⁵⁾という定義を忠実に引き継ぐものであったといえる。

さて、以上に加え牧口は、『俄氏新式教授術』からランゲ、デューイ²⁶⁾、ラッカルスによる類化の定義(それらはすべてデ・ガーモの定義を裏づけるものばかりである)を長文にわたり引用したうえで、こう結論づける。「[類化作用は] 善に緊要なる教育の一作業たるのみならず、之なくば人類相互の間に於ける思想の伝

達をなす能はざるべし。[…]換言すれば、思想の序列の、能く教授上の必須段階を完備せるに外ならざるなり」(7, 148, 下線筆者)。ここで牧口は類化を、それなくしては言語コミュニケーションさえ不可能な、「思想の序列」の必須段階であると明言している。カント、ヘルバート風にいえば「思考の可能性の条件」である。これはヘルバート派の翻訳書(本稿注4の③から⑥)が、ヘルバート自身の表象概念の多義性ゆえに Vorstellung を「心象」として解釈したのに対し、「概念」の側面に比重をおいた解釈であるといえよう。ケルンの引用箇所ではまだ残存していた「観念」の定義の曖昧さが、ここではかなり払拭されており、それには言語の論理性を重視したデ・ガーモのヘルバート解釈が影響を与えたものとみてよいだろう。

こうして類化の定義とその教育上の重要性を確認したうえで、牧口はさいごに、この類化は「開発教授」(ペスタロッチに始まる、子どもの発達段階に即し、かつ自発性を引き出すように教材や教授過程を編成する教授法)によってこそなされるものであること²⁷⁾、また類化はヘルバート派が「教育の目的」として掲げる「興味の喚起」²⁸⁾にとって不可欠の要件であることを指摘する。そして「然らば如何して類化作用を誘導すべきか。(未完)」という一言で論文を締めくくる(じっさいはつづきは書かれなかった)。

以上、牧口の論文「観念類化作用」の内容を概観しつつ、彼の類化論理解を、彼が参考にしたと思われるヘルバート派の翻訳書との関わりから検討してみた。再度簡単にまとめておくと、ヘルバート自身の表象概念の多義性がヘルバート派教授理論にも受け継がれ、またその多義性に対する理解がなされないまま日本に移入されたため、牧口の類化理解もその曖昧性の影響を免れなかつた(ケルン著『教育精義』などを通して)。しかし同時にデ・ガーモ著『俄氏新式教授術』などを通して、観念を心象から独立の「概念」としても解釈する見方を学んでおり、類化を「旧概念群による新概念群の同化」もしくは「既知の概念群による知覚対象の把握」としても理解していた。それゆえ類化を「思想の伝達」「思想の序列」の可能性の条件として定式化していた。このようにいうことができよう。

3. 初期牧口における類化論受容のゆくえ

「観念類化作用」は未完のまま終わったが、それは牧口とヘルバート類化論との関係が終わつたことを意味するものではない。その後の牧口の論文を注意深く読むと、むしろそれら諸論文は、「如何して類化作用を誘導すべきか」という「観念類化作用」の最後の一文に答るために書かれたものであったとすらいえる。紙幅の都合でやや手短かにならざるをえないが、そのことを初期論文集をもとに跡づけてみよう。

「観念類化作用」の翌年に執筆されはじめた「単級教授の研究」(1897-98 [明治30-31])では、教授目的である「興味」を子どものうちに喚起するには「心理学の理法」に基づかねばならないと述べている。心理学の理法とは、いうまでもなく類化のことである。「興味は巧に類化作用を誘導するより生ず。[...] 類化作用を軽快ならしめんとせば、旧観念と新観念の連絡点を明瞭たらしめざるべからず」(7, 210, 下線筆者)。そしてこの観点から、学科の「論理的順序」にしたがって教材の排列が決められるべきであるとし、とくに修身と作文の2科について具体的な提言を行う。まず修身科であるが、牧口は「『孝』と『忠』とのいぢれを先に教授すべきか」との論争にふれて、「新観念の類化は、一に既存の旧観念にあり。近に [原文ママ、を] 遠に及ぼせとの確言は、是 [=修身科] にも適用すべきもの」(7, 220, 下線筆者)と述べ、子どもの観念は家庭・近隣を出ない以上、孝より始めるべきであると提言する。ここで牧口は「観念」の語を直觀的心象に近い意味で用いており、これは「観念類化作用」での2種の類化解釈の一方、すなわち「旧心象群による新心象群の同化」という解釈を引き継ぐものとみてよいだろう(本稿前節参照)。ちなみに、類化を「近を遠に及ぼせ」というペスタロッチ的直觀教授法のスローガンと結びついているのも、「観念類化作用」の結論部分を継承したものである(同上)。つぎに作文科であるが、牧口は、作文における論理的順序とは何よりも「文法上の順序」(主述関係などの文法法則)であるという。それなしに正確な思想表現はなしえないからである。ただし文法は、数学における論理的順序とは異なるため、「互に類似したるもの」を前

後連絡し、可成現在のものは次回の予備なり、次回には前回の知識を活用し、以て一類例を決了したる後、他の類例により、以て相連絡したる観念と関係を授くれば足る」(7, 226, 下線筆者)。この主張では2種の類化解釈のもう一方、すなわち「旧概念群による新概念群の同化」としての類化論が基礎になっていくとみてよい。

ところが類化のこうした2種の解釈は、その後しだいに前者(観念を「心象」とする解釈)よりも後者(観念を「概念」とする解釈)のほうにウェイトが置かれていき、それと同時に、概念獲得における論理的秩序、すなわち「文法上の順序」にいっそう眼が向けられるようになる。その直接の理由は不明である(おそらく牧口が作文教授法の研究に勤しみはじめたためと思われる)が、本稿前節でみたように牧口がすでにド・ガーモ著『俄氏新式教授術』などの影響から、類化を「思想の伝達」「思想の序列」の不可欠の条件として捉えていたことを考慮すると、こうした展開の準備は以前から整っていたともいえる。この時期の代表作である「如何にして讀書と作文とを連絡あらしむべき乎」(1898 [明治31])をみてみよう。ここで牧口は、子どもが「文法上の順序」を効果的に習得するには、まず讀書科での「模範文体」の習得こそが先決であると述べ、その方法として「書き取り」の実践を挙げる。「[模範文体の習得は] 思想の秩序整然たる序列を構造せしむることなれば、観念をして各々其所を保たしめ、吾人が事物を記憶し、統一したる思想を得るに於て、欠くべからざる所。加之児童将来の處世上に應用すべき範囲は、無限なりと云ふべし」(7, 276, 下線筆者)。ここでは文法法則と観念類化との密接な関係が示されているといえる。もっともこの一事のみをもって、牧口がこの時点で模範文体の習得を「類化」と結びつけていたとの断定はできない。この論文の前に書かれた「開発教授の一弊」(1897 [明治30])をみると、「心理学上の基礎とは観念の類化と系列とはなり。甲 [=観念の類化]は観念の会得に關し、乙 [=観念の系列]は観念の把住 [=定着] に要す」(7, 267)とあり、文法法則は観念の獲得よりむしろ定着のほうに関係すると述べているふもあるからである。しかし先の引用箇所では、模範文体について、「處世上に應用すべき範囲は、無限なり」と述べており、この「應用」とは模範文体を

もとに作文の対象を把握・記述することであるから、その根底にはやはり類化作用が前提されているといえよう。

こうした文法重視の傾向がさらに徹底されるのは、「作文教授につきて」(1898 [明治31])である。作文において「児童の困難とする所のものは、思想にあらずして、思想を発表する方法にあり。即ち文法にあり」(7, 295)と牧口はいう。人は無から有を生ずることはできず、必ず過去に学習した「文体」にのっとって既知の熟語を収集・排列するほかないからである。しかし模範の文体は、偶然にまかせて習得しうるものではない。牧口は、読書科と作文科とを今以上に関連づけるべきであるとし、ヘルバート派の五段教授法を媒介に両者の統合をはかろうとする。「五段教授は、初めの四段 [=予備・提示・比較・概括] に於て明瞭なる概念を構成し、終りの一段 [=応用] に於て、其抽象したる概念を他の個体に応用すべきを示す。今此科 [=作文科] を五段教授法より見ば、読書は即ち概念に到達すべき部分にして、作文科は実に其概念を格段なる個体に応用すべきものに属す」(7, 309, 最初の下線のみ筆者)。ここで牧口は、読書科での模範文体の学習を「明瞭なる概念の獲得」に、作文科での応用を「抽象概念による他の個体の把握」に対応させている。つまり模範文体の学習と類化作用(旧概念群による新概念の獲得・把握)とは別のものではない。前者は後者に形式をあたえるという点で後者の構造的的前提ともいべき位置づけを与えられている。文法法則が類化の「可能性の条件」として把えられているともいえよう。こうした牧口の見解は、ド・ガーモの「類化作用とは、通常新たに得たる個体的の概念を、其外延及び内包に於て、更に一層完成せる老熟の賓位内に包含する的作用」(『俄氏新式教授術』), あるいはリンドネルの「未知を既知に、新を旧に、特別を一般に、多数を一個に、種を族に、主格を賓格に従属せしむる作用」(『倫氏教育学』)という定義を「文法法則」という観点から展開させたものとみてよいだろう。それゆえ牧口は、自らが「観念類化作用」の最後に掲げた「然らば如何して類化作用を誘導すべきか」という問いを、ここにおいて「然らば如何して文法学習を誘導すべきか」という問い合わせへとシフトさせたことになる。そしてこの課題は後年、牧口自身の手によって「文型応用主義」という作文指導法と

して展開されていくことになるのである²⁹⁾。

以上、やや急ぎ足ではあったが、初期牧口の主な論文を取り上げ、前節でみた彼の類化論理解がいかなるかたちで彼の思想形成に影響を与えていたかをみてみた。ヘルバートおよびヘルバート派教授理論家の多くが有していた「表象」概念の多義性は、当初牧口の理解にも多少の曖昧性を与えずにはおかなかったが、彼の作文教授法の研究が深まるにつれてその曖昧性はしだいに払拭された。そして教授法の原理を「認識の可能性の条件としての類化」へ、さらには「類化の可能性の条件としての文法」へと探求していったのである。

結びにかえて

本稿では牧口が1896-98年(彼の年齢にして25-27歳)にかけて書いた論文を扱ったが、このように初期の論文には、その後牧口の主要理論となつたもの(本稿の場合は「文型応用主義」)に与えたヘルバート思想(本稿の場合は「類化」)の大きな影響を確認しうる。もちろんヘルバートの類化論と牧口との関わりはこれで終わるのではなく、論文「山と人生」(1899 [明治32])から、『人生地理学』(1903 [明治36]), 『教授の統合中心としての郷土科研究』(1912 [大正1]), 『地理教授の方法及内容の研究』(1916 [大正5]), そしてさらには『創価教育学体系』全4巻(1930-34 [昭和5-9])に至るまで、類化論のモチーフは引き継がれていく。またその影響も単に文型応用主義だけには限られない³⁰⁾。その意味で、類化論は牧口思想の大きな地下水脈の一つであり、本稿はその源流部分を扱ったものにすぎないが、これによってヘルバート思想が牧口思想の出発点として有した意義の一端を示したとすれば、本稿の目的は達されたといえる。

※引用について: 牧口からの引用は『牧口常三郎全集』(全10巻, 第三文明社, 1981-96)を、ヘルバートからの引用は Joh.Fr. Herbart's Sämtliche Werke, in Chronologischer Reihenfolge, 19Bd., Hg. Von K. Kehrbach und O. Flügel, Langenzalza, 1887-1912. を用い、それぞれ()内に巻数、頁数を示す。それ以外からの引用は注に別記する。[]内は筆者の挿入であり、下線はとくに断りのない場合は原文の強調箇所である。

注

- 1) ヘルバートは1809年より25年間、ケーニヒスベルク大学のカントの講座を継承し、カント哲学の正統的後継者をもって任せた。『一般形而上学』(Allgemeine Metaphysik, 1828) の序文でも、自らを「1828年にしてなおカント学徒である」(7, 13) と述べている。
- 2) ヘルバートは、後述する表象力学説によって19世紀末のウィーン実験心理学に影響を及ぼすなど、心理学でも重要な貢献をなしている。上山安敏「社会現象としての感覺論—ドイツ世紀末から世紀転換期」(『現代思想』1999年9月号所収) を参照のこと。
- 3) 牧口解釈における、ヘルバート哲学・心理学理論に対する理解の重要性を論じた数少ない論考として、斎藤正二「『人生地理学』研究のための序論」(全集2, 所収)、同「ヘルバート《實在論》から牧口《価値論》へ」(『創価大学教育学部論集』第36, 37, 40, 41, 42号、創価大学教育学会、1994年3月—1997年3月) がある。
- 4) Apperception の訳語は多数存在する。本稿は牧口思想の形成過程を問題にするものであるため、彼が使用している「類化」という訳語を一応採用するが、これが最適の訳語であるかどうかは議論の余地があろう。牧口自身、多数の訳語があることを承知していたようで、「同化と云ひ、融化と云ひ、合化と云ひ、自覚と云ひ、訳書によりて種々ありと雖、其意義に於ては異なるなし」(7, 144) と述べている。なお牧口が当時眼にしたであろうヘルバート派の翻訳書(ただし Apperception に触れているもの)における訳語を管見の限り示しておくと、①デガルモ著、本荘太一郎訳『俄氏新式教授術』(牧野書房、1891 [明治24]) は「自覺作用」あるいは「同化」、②ケルン著、山口小太郎訳『教育精義』(普及舎、1892 [明治25]) は「融会」または「融化」、③ケルン著、沢柳政太郎・立花銑三郎訳『格氏普通教育学』(富山房、1892 [明治25]) は「会得」、④リンドネル著、湯原元一訳『倫氏教育学』(金港堂、1893 [明治26]) は「類化」、⑤ケルン著、国府寺新作訳『ケルン教育学』(成美堂、1893 [明治26]) は「融会」または「同化」、⑥リンドネル著、田中治六・三石賤夫訳『麟氏実験心理学』(丸善、1894 [明治27]) は「自覺作用」、⑦ヘルバート著、国府寺新作訳『ヘルバート心理学』(成美堂、1895 [明治28]) は「同化」とある。また「觀念類化作用」執筆後では、⑧ヘルバート著、藤代楨輔訳『独立ヘルバート教育学』(成美堂、1896 [明治29]) は「統覺」あるいは「会得」、⑨ライン著、湯本武比古訳『ラインの教育学原理』、紅梅書屋、1896 [明治29] は「類化」とある。
- 5) 鈴木晶子「感覺の技—タクト」(『現代思想』1999年9月号所収) に、その簡便な紹介があり、本稿での説明も部分的にそれに負うている。
- 6) 浜田栄夫『表象理論とヘルバート』(玉川大学出版部、1995) によれば、こうした表象の定義はヒュームのいう idea に近く、ヘルバートがロックの idea の訳語として Vorstellung ではなく Idee をあてているのも、ヒュームからの影響が考えられる

- という。ロックが idea という語を心象や想念や形象など極めて広い意味で用いた(『人間悟性論』)のに対し、ヒュームは感覚によって直接把握される「印象(impression)」と、印象をもとに再生される「觀念(idea)」とを区別している(『人性論』)からである。
- 7) フッサー著、立松弘孝訳『論理学研究I』、みすず書房、1968年、237頁。
 - 8) 同上(ただし訳文を一部変更した)。
 - 9) しかしながらこの両義性がヘルバートの論理学的見解を曖昧なものにしてしまい、その影響がロツェの論理学にも陰を落としているとフッサーはみている(同上、239-41頁)。
 - 10) Kant, I., Kants Werke. Akademie-Textausgabe Bd. III, *Kritik der reinen Vernunft*, 2. Auflage, Berlin, 1968, B33.
 - 11) ebd., B93.
 - 12) 牧口が『倫氏教育学』を参考にしたことを窺わせる別の事例として、「觀念類化作用」中の「フヲクルマン【原文ママ、フヲルクマン】氏曰く、教授術は巧に類化作用を誘導するものなりと」(7, 149) という一節と似た、「フヲクルマン氏曰く、教授の術は、巧に類化作用を誘導するにあり」という文が『倫氏教育学』146頁にあることが挙げられる。
 - 13) 『教育精義』32頁。
 - 14) Kern, H., *Grundriss der Pädagogik*, vierte Auflage, Berlin, 1887.
 - 15) 『倫氏教育学』4頁。
 - 16) 同上、5頁。
 - 17) Lindner, G. A., *Allgemeine Erziehungslehre*, siebente verbessert Auflage, neu bearbeitet von Fröhlich, G., Leipzig u. Wien, 1890.
 - 18) 『倫氏教育学』、145-146頁。Allgemeine Erziehungslehre, S.85.
 - 19) 『麟氏実験心理学』、217頁(なお原訳書ではすべての文字に傍点が付してある)。
 - 20) 『俄氏新式教授術』、30頁。
 - 21) 同上、3頁(原注の訳)。
 - 22) その証拠に、『俄氏新式教授術』34頁にケルンの *Grundriss der Pädagogik*(『教育精義』の原著)、S.28 からの引用があり、ケルン原文の Vorstellung が「総念」と訳されている。
 - 23) 『俄氏新式教授術』、25-6頁。
 - 24) Lindner, G. A., tr. DeGarmo, C., *Manual of empirical psychology as an inductive science: a textbook for high schools and colleges*, D. C. Heath, 1889.
 - 25) 『倫氏教育学』、145-146頁。Allgemeine Erziehungslehre, S.85.
 - 26) 牧口の文では「ユーエ氏曰く、新事物の心界に入れて曉得明識せらるるは、[...] 其事物の、吾人の自余の諸経験と秩序ある方法を以て聯結せらる、の時に在り。[...] 単独なるもの、分離せるものは決して智識の目的にあらず」とあるが、『俄氏新式

教授術」34頁ではこれは「デューイ(Dewey)」の「心理学」第85節「自覚作用」からの引用とある(デューイの「心理学」は1887年、「俄氏新式教授術」の原書*Essentials of Method*は1890年の出版)。なお從来初期デューイについては、ヘーゲルからの影響のみ強調されてきた傾向がある(鶴見俊助「デューイ」講談社、1984など)が、彼がこのように類化を論じていること、また彼の卒業論文が「カントの心理学」(1884)であることを考慮すると、カント=ヘルバート主義受容の側面も重視される必要があろう。

- 27) この主張は、当時すでにペスタロッチ流の開発教授が時代遅れになり、ヘルバート派の五段教授にとって変られつつあった時代背景を考慮すると、両者を結びつける見解として興味深いが、じつはこれも「俄氏新式教授術」からの影響が考えられる。同書の「凡例及ビ序言」で訳者本荘太一郎が「開発主義ト云ヘルコトハ、ヘルバート上ガ教育ノ科語トシテ始メテ用キタルモノナリ」(同書1頁)と述べているからである。
- 28) 教育目的としての「興味の喚起」というヘルバート主義の理念は、その後も牧口が「人生地理学」(1903〔明治36〕)から「創価教育学体系」全4巻(1930-34〔昭和5-9〕)に至るまで長く抱きつづけたものであった。「ヘルバート主義が教育の目的は知識の授与にあらずして、興味の涵養にありと主張した〔ことは〕、教育史上の大革新であつたのである」(6, 284〔「創価教育学体系」第4巻〕)。
- 29) 牧口中期の論文「綴り方教授の科学的研究」(7, 395-408)などを参照のこと。
- 30) たとえば「学習の経済」という、牧口教育学の中心思想もそのひとつといえる。詳細は稿を改めて論じたいが、「観念類化作用」で牧口が引用するリンダネルやランゲの文章が、すでに類化と学習経済論との関係を示唆している。「リンダネル氏曰く、[...] 類化作用は思想を堅縮する一種の作用にして、因て以て吾人の意識の直機的形成を遂ぐるものなり。能類化観念は記憶の最良支柱なり。若し此の作用なくは、吾人外聞の事実は、飄然として吾人の心中を通過するのみならんと」(7, 147, 最初と最後の下線は筆者)。「ランゲ氏曰く、自覚作用なければ、心意は其勞莫大なるも其功少なかるべし。吾人は己れの中に全く関係せる思想なく、全く連結すべき諸点なく、関係概念の富饒なる蓄積なきものに対しては、視るべきの眼なく、受納すべき力なく、識得すべき心なしと」(同、下線筆者)。これらの引用文では、類化が認識や記憶を効率よく(=無駄なく)行う条件であるとの見解が述べられている。これはのちに牧口が重視する学習経済の思想——「学習力及び教授力の使用上の経済は教科の排列を科学的にして之を編成するでなければ行はれるものでない。單に偶然の排列若くは不秩序の排列、不統一の排列では、之を学ぶものに同じ心力を使はせて其結果が非常に悪くなるのである」(7, 377〔「学習経済より見たる地理教授の改造」〕、下線筆者)、「経済を原理とせよ。／学習力に於て、教授力に於て、時間に於て、費用に於て、言語に於て、音声に於て、常に経済原理を旨とし、文化価値を目標として進め」(6, 27〔「創価教育学体系」第1巻〕、下線筆者)——と

通底する思想であるとみてよい。

(いとう たかお・委嘱研究員)